

## コラム 23ー 世界に類を見ない敵の弔魂碑の建立

乃木大将は旅順での戦闘が終わった後、「ロシア将兵の墓地が散在しているので、できれば 1 箇所を集めて標識をつけて、氏名などを明らかにして供養したい」と述べ、1908 年（明治 41 年）3 月、旅順の案子山（あんしざん）にロシア将兵を弔う「礼拝堂」（高さ 10 メートル）（写真）を建立しました。礼拝堂は、ロシア風に 造



礼拝堂

られ、表面にはロシア語で「旅順防衛戦のロシア殉難烈士の遺骸ここに安眠す。1907 年日本政府この碑を建つ」と刻まれており、背面文には当時の関東都督である大島義昌陸軍大将の追悼文が刻まれていました。その文面は要約すると、「ああ不幸にも戦場で一命を落とした者のために、たとえ仇敵であっても、これを手厚く埋葬するのは当然である。これによって、互いに忠義の道をつくしたことをたたえあう、仁愛の道を広めなければならない。ましてや去年は仇敵であるといっても、すでに友好を結んだ同志ならばなおさらではないか。・・・戦没者を百代にわたって弔い、その義烈を千年の後にもしめすため、ここにこの碑を建つ」と書かれている。この「露国戦死者建碑除幕式」は、同年 6 月 10 日に举行され、ロシア国民はみな大感激をしました。

一方、日本側が自国の戦没者を供養するために、「表忠塔」を建立して、白玉山頂にて除幕式を举行したのは、1909（明治 42 年）11 月 28 日でありました。つまり、日本は敵の慰霊を先に行い、自国の慰霊は後にまわしたのである。ここに日本武士道の気高さと、敵を敬う武士道精神が息づいていたことが、垣間見えるのであります。日本は、なぜこのように「敵を敬う武士道精神」を貫くことができたのか。それは、第 1 篇・第 1 章 建国の由来で述べた明治天皇の御製、

「国のため あだなす仇は くだくとも いつくしむべき 事な忘れそ」  
の精神を忘れなかったからであります。そして、天皇を心から崇敬する日本人にとって、知らず知らずのうちに、天皇の大御心を自らの中で具現化させていたのです。

日露戦争後、当時のニューヨークの「イーグル」紙は次のように伝えていきます。「日本の勤皇心は、不思議にもその政治家または武人の功績を、天皇のご威徳とする。たとえば、東郷提督は対馬海峡における全勝を天皇陛下のご威徳であると公言し、乃木大将も旅順港におけるロシアの防備を破壊した勇士を感奮させたものは陛下であるといい、黒木大将も鴨緑江の横断の成功を陛下のご威

徳によるものとし、大山大将の奉天の戦勝もまた同様である。それなのに、西洋人はこのような日本人の天皇に対する崇敬心を、嘲笑的冷笑を以ってし、これが単に封建時代から伝わった礼式ではなく、すべては国民的特性であることを見落としている」と述べていることは注目すべきことです。